

ジェレミー・スタイグ デビュー作『フルート・フィーバー』について

by アサコ・スタイグ

『フルート・フィーバー』は、米国で1963年にコロンビアから発売されましたが、日本では、1969年のVerveの『ホワッツ・ニュー』の後、『ジェレミー・スタイグ・ファーストアルバム』として、CBS SONYから発売されています。そのライナーノート（流異丸男）によると、「『フルート・フィーバー』は日本においても一度発売されたのであるが、知名度の低さ、その刺激的なサウンドの為にあまり受け入れられることなくすでに市場から姿を消し」となっています。これが本当だとすると、63年の米国盤のウィリス・コノヴァー氏によるライナーノートを読んだことのある日本人は少ないのではないのでしょうか。ジェレミーがバンドメンバーを描いたイラストと共に、本人の当時の言葉を引用する形で書かれています。その中に、「普段はとても静かなジェレミーなのに、なぜ演奏はとても荒々しいのか」という質問があります。ジェレミーは、「ためこんでいるんだ。子供のころから、どうすることもできない一種の怒りがあるんだけど、一度も怒ることができない。音楽の中以外では。実はフラストレーションの表現であって、憎しみの表現ではないんだ」と答えています。このオリジナル版は、2013年に再リリースされたデジタル・リマスター版にも英語のまま印刷されていますが、ご存じのようにLPの面積をCDに縮小すると文字が小さすぎてとても読みにくのが現実。当時のジェレミー自身の言葉が多く引用されているため、日本のリスナーがこれを読まないのはもったいないことです。ちなみに、このデジタル・リマスター版には日本語のライナーノート（2014年原田和典）が付いていて、その中に1960年代後半にこのアルバムを聴いたときの印象を作家の立松和平氏が1981年のエッセイに書いた文が引用されています。立松氏が聴いたのも『ファーストアルバム』だったのでしょうか。

米国版のライナーノートは、以下のように結ばれています：「真の変わり者。何かを創造し、やりたいことを自分のやり方でやろうと試みるアーティスト。そして、もし可能なら、それを生業にしようとしている。グリニッジ・ヴィレッジのページ・スリーや他の店で、飛び入り演奏をするジェレミーに出くわすかもしれない。見ればすぐにわかる。ヒゲがなくて16歳くらいに見え、スケッチブックを持って歩いている彼だ。そしてフルートを吹くと、こんな音を出す（では、レコードをかけてください）」。

さて、スクラップブックに掲載した1968年8月8日の『ダウン・ビート』のローランド・カーク氏による「目隠しテスト」の中で、カーク氏は「最近、ジェレミーは、レコード店で自分と会っても挨拶もしない。私からすれば、そういうのはすべてニューヨーク病だ。レコード会社や親たちが、人々の間に壁を作るためにそういうことをするんだ」と言っています。私がこの記事を初めて読んだとき、「そうなの？」とジェレミーに尋ねると、「実は（レコード屋でカーク氏が目に入ったとき）ただ照れくさかっただけなんだ」と言って肩をすくめました。本人に訊くと意外なことがわかるものですね。（2017年7月）